

George Eliot: Victorian Women and Her Heroines (1)

石田美栄
Mie Ishida

I

19世紀ヴィクトリア時代の代表的作家ジョージ・エリオット (1819-1880) は、これから取り扱ってゆきたいと思っている作品を書きあげるよりも以前に (1855) “Margaret Fuller and Mary Wollstonecraft” と題するエッセイを書いている。このエッセイはアメリカの女流作家 Margaret Fuller の *Women in the Nineteenth Century* (1843) とそれよりもずっと以前に書かれた女性解放思想の古典といわれるイギリスの女流作家 Mary Wollstonecraft の *Rights of Women* (1796) を比較し論じたものである。その中に、ジョージ・エリオット自身のその時代の女性問題にたいする考え方を窺い知ることができる。例えば、Margaret Fuller に次のような解釈を与えて、賛同を表している。

. . . ; but a calm plea for the removal of unjust laws and artificial restrictions, so that the possibilities of her nature may have room for full development, . . .¹

そしてまた自分自身の意見として次のように述べている。

On one side we hear that woman's position can never be improved until women themselves are better; and on the other, that women can never become better until their position is improved—until the laws are made more just, and a wider field opened to feminine activity. . . . But we want freedom and culture for woman, because subjection and ignorance have debased her, and with her, Man; for—

If she be small, slight-natured, miserable,
How shall men grow?²

Viola Meynell は *Romora* の序で “It is clear that George Eliot's ideal of a woman's character was an innovation in her own day.”³ と述べているが、ジョージ・エリオットはあらゆる作品の中でそれを試みている。なにものにも束縛されない、自由な魂であろうとする女性の姿である。そこには自分自身を確認してゆく過程が描かれ、自己に目覚めてゆく。しかし、女性が自ら自我を確立してゆく伝統はまだなく、自分と周囲とのそして自我と良心との相剋を生むことになる。⁴

ヴィクトリア朝前半の中流階級の女性が、. . . 自らを. . . 養うことのできる職業はほとんどなかった。 . . .

女性に議論の余地なく適した、かつ無制限の社会的承認を勝ち得る唯一の職業、それは結婚であり、結婚生活の絆の中で行使される妻と母親という二重の役割であった。⁵

妻となり母となる以外に自己実現の方法のない時代、他によってしか自我の主張のできない時代に、とりわけ家庭における母親役割の重要性が強調された19世紀において、女性の自己の意志を貫こうとするヒロインたちの苦悩は測り知れない。結局主体的な自我の確立は不可能であって、妥協あるいは挫折せざるをえない。ジョージ・エリオットは「道徳的」とか「倫理的」とか「伝統的」な作家といわれる。

・・・ there must, one reflects, be something more important to say about the moral seriousness of George Eliot's novels ; otherwise she would hardly to be the great novelist one knows her to be.⁶

しかし、ヒロインたちの自我の確立、存在の実現を試みようとしたエリオットの真の意図からみるならば、いずれのヒロインも自我の放棄、すなわち死 (*The Mill on the Floss* の Maggie) であり、因習的な周囲への妥協 (*Middlemarch* の Dorothea) であり、自我の敗北 (*Daniel Deronda* の Gwendlen) である。我々が *The Mill on the Floss* や *Daniel Deronda* の結末に希望よりも暗いものを感じるのには、そうしたことによるのではないだろうか。*Middlemarch* の終りには明るさがみられるけれども、少々の失望感を持つ。結局 Dorothea が求め続けたものは、こんなことだったのかという感想である。しかし当時は「... シャーロット・ブロンテやジョージ・エリオットはお仕着せの女性像に反撥した。だが、当時彼女の階級の女達には、妻となる以外自己実現への途は開かれていなかった。ドロニアはこうした通常の女のコースに満足できなかったものの、どうすべきかとなると階目分からなかった。結局、彼女もジェイン・エア同様、妻となり母となることに己の道を見出したのだった。」⁷

ジョージ・エリオットの生きたヴィクトリア時代、特にその前半をもう少し詳しくみていくことにする。*Victorian Women: A Documentary Account of Women's Lives* を読んでみると、その事情がよく分る。18世紀から女子教育が盛んになり、女性の目を覚すことになった。また産業革命によって女性の労働も苛酷な搾取を受けるようになったが、いずれにしても女性の社会性が認められるまでには至らない。女子教育はあくまで妻として母としての役割のためのものであった。それでも教育は女性の自我を目覚めさせ、自己の存在を求めて創作を促すことになった。恋愛・結婚・家庭での女性の自由は持てるようになったとしても、社会人としての存在からはまだ程遠く、輩出した女流作家たちは、各々に偽名を使ったり、男性名を装ったりしている。このような、女性たちの苦闘の時代を次の文章はよく伝えている。

Thus women of that time, which being urged to think themselves only relationally, were also, by the very nature of the metamorphosing societies in which they lived, being challenged to the creation of themselves as persons with separate and interesting destinies. These two virtually antithetical impulses shaped the early years of the Victorian girl.⁸

. . . , motherhood was celebrated with unprecedented intensity in the 19th century. . . . , in the Victorian era bureaucrats and politicians fostered the idea of the personal family and stressed the social responsibilities of the “Republican Mother,” breeder of citizens. The good mother, like the submissive and sexually pleasing wife, had her role to play in this new ideology by seeing to it that the family remained strong and intact, a bastion against social upheaval as well as a pillar of the state. Influential women writers, too, seeking a worthy role for women in a changing world, celebrated motherhood. . . .⁹

II

ここでは先ず、自伝的要素の強い、*The Mill on the Floss* の中にヴィクトリア時代の女性の姿そしてヒロイン Maggie の苦悩、成長、限界をみてゆきたい。それはまた、作家ジョージ・エリオット自身の時代への挑戦であり、苦闘であり、限界を覚ることもあった。

ジョージ・エリオットの小説に流れている「沈痛」なムードは、明るい晴れ間を見ない、はてしなくつづく重い垂幕のような印象を与える。 . . . ジョージ・エリオットを読む私は、いつの間にか、重苦しい作者の筆致の背後に感じられる、彼女の実生活上の苦悩への共感にひたってしまう。 . . .

「フロス河畔の水車場」は追憶の書であると言われているが、この追憶の書には、暗さ、陰うつさが一杯にみなぎっている。開巻第一頁から、第7巻の最終頁に至るまで、作者ジョージ・エリオットの暗い心境、救いようのない悲しみを必死にこらえようと苦しむ作者の心境¹⁰ . . .

これは藤田清治のこの作品への印象であるが、このような暗い雰囲気はいったいどこからくるのだろうか。川本静子は『イギリス教養小説の系譜』の中で、Maggie を「 . . . 彼女の生きた時代と場において、マギーは終始 “みにくい家鴨の子” であり、その内なるものと外なるものとの軋轢は、女であるがためにさらに拍車をかけられている。」¹¹と述べている。Maggie は生来自我が強く、「鋭い知的要求と豊かな情感を具えた人間」¹²である。彼女の生きたヴィクトリア時代そして彼女の属した St. Ogg's という限られた地域、中流階級は、強い道徳観と因襲で固められたものであった。従って、Maggie の生きる道には子供の時代からずっと、抑え難い自我の主張、個性や能力を発揮する方法がなく、なにかしようとするといつも時代や因襲に従うべく抑えつけられ、出口を失ってゆく。そしてまわりからは手におえない子供、なにをしでかすかわからない危険な娘とされてしまう。

Maggie の人生は子供時代から社会不適応の連続である。兄の Tom はそれほど頭がよくなくて、勉強は好きでないのに大金を掛けていい学校にやられるが、Maggie は家で女の子のすべきことをやらされる。

“Oh, mother,” said Maggie, in a vehemently cross tone, “I don’t *want* to do my

patchwork.”

“It’s foolish work,” said Maggie, with a toss of her mane “tearing things to pieces to sew’em together again. . . .”¹³

面白いことを言う娘だなどという考えは通らないのであって、Maggie が問題の娘にされていくのに役立つだけである。父親の Mr. Tulliver は “a woman’s no business wi’ being clever ; it’ll turn trouble, I doubt.” (p.13) “It’s a pity that what she’d been the lad-she’d ha’ been match for the lawyers, she would. It’s the wonderful thing.” (p.15) と言う。

Maggie はいわゆる利発な、おてんば娘である。時代が時代であれば、社会にあって某かになれたであろう。悲しいかなヴィクトリア時代では、社会への道はまだ固く閉ざされていた。本好きは非難され、服をよく汚すと叱られ、髪をきれいにとかさないと咎められる。そして、その時代の典型的な娘である従妹の Lucy といつも比較されてしまう。長い髪が女の生命とされていた時代¹⁴にあって、少女 Maggie は自分の髪を短く切ってしまう時、次のように考えている。

. . . but with a sense of clearness and freedom, as if she had emerged from a wood into the open plain. (p.57)

短い髪の方がもつれたりしないで、活動的でさっぱりしていいなどという自然で自由な発想などともないことで、これは大失敗であった。皆んなから嘲笑をかうことになってしまう。ジプシーの群の所へ行く一件も、囲りの人々からはただただとんでもない小供としてみられ、Maggie の本当の気持を理解してくれる者は誰もいない。「それは、内なる衝動と外なる事実との抗争矛盾の日々に他ならなかった。」¹⁵

この小説の中でわずかに Maggie の生きられる場所、Maggie が自分の存在を感じることができたのは、Tom の学校を訪問して、そこにしばらく滞在できた時である。ユークリット幾何学やラテン語など当時女性が学ぶことのなかった、あるいは学んではならなかった学科に接することができたのである。

Nevertheless, it was a very happy fortnight to Maggie, this visit to Tom. She was allowed to be in the study while he had his lessons, and in her various readings got very deep into examples in the Latin grammar. . . . (p.139)

そしてまた、ここ Tom の学校では、この小説の中で Maggie の真の姿をある程度本当に理解してくれるただ一人の人物といえる、Philip との出会いがある。Philip は Maggie の目に、満たされない知的欲求そして満たされない感受性（それは理解されたい気持）を見て取る。Philip は Maggie の知的欲求に応じてくれる。この Philip とのしばらくの交わりは、Maggie の短い生涯で最も幸せな一時期であった。それは異性とか恋愛感情というよりも、初めて本当の理解者、自分のはげ口・生きることを得た喜びであった。そしてこのような Maggie の生き生きした姿はこの小説では二度と出てこない。こ

の時の体験、実感が後の Philip との感情にそのまま受け継がれてゆく。それは、この時だけは Maggie が迷うことのない、解き放たれた自分自身を持つことができたからである。

Maggie は若くても人間としての分別があり、重要な場面でより冷静で公正な考えを示している。Mr. Wakem と Mr. Tulliver の敵対関係とは別に、また Philip の奇形に対する人々の偏見とは別に、Maggie は Philip の人間性の優れた点を認めることができる。それもいわゆる女性的な感傷や同情からではない。

“I think Philip Waken seems a nice boy, Tom,” she said, when they went out of the study together into the garden, to pass the interval before dinner. “He couldn’t choose his father, you know; and I’ve read of very bad men who had good sons, as well as good parents who had bad children. And if Philip is good, I think we ought to be the more sorry for him because his father is not a good man. You like him, don’t you?” (p.165)

また父親が Tom に Mr. Wakem への復讐を誓わせる場面でも、Maggie の正しさがみられる。

There was a dead silence as Tom’s pen moved along the paper: Mrs. Tulliver looked scared, and Maggie trembled like a leaf.

“Now let me hear what you’ve wrote,” said Mr. Tulliver. Tom read aloud, slowly.

“Now write—write as you’ll remember what Wakem’s done to your father, and you’ll make him and his feel it, if ever the day comes. And sign your name Thomas Tulliver.

“Oh, no, father, dear father!” said Maggie, almost choked with fear. “You shouldn’t make Tom write that.”

“Be quiet, Maggie!” said Tom. “I shall write it.” (P.249)

最後に父親が Mr. Wakem に襲いかかった時、止めに入るのも Maggie である。その正しい人間である Maggie が、信頼のおけない問題の人間にされるのは何故なのか。この時代に生れた有能な女性の悲しさではないか。

She thought it was part of the hardship of her life that there was laid upon her the burthen of larger wants than others seemed to feel—that she had to endure this wide hopeless yearning for that something, whatever it was, that was greatest and best on this earth. She wished she could have been like Bob, with his easily satisfied ignorance, or like Tom, who had something to do on which he could fix his mind with a steady purpose, and disregard everything else. (p.269)

“Because you are a man, Tom, and have power, and can do something in the world.”

“Then if you can do nothing, submit to those that can.” (p.326)

女である故に、Maggie のような人物の生きる場は、その時代にはなかったのである。

Maggie と Philip, Stephen の関係についてはまた後に論ずるとして、ボートでの漂流の際にも、Maggie は終局的には分別のある行動をとるが、世間からは本当のことは全々理解されない。わずかに Philip だけが、Maggie を理解してくれる。こうした Maggie の本当の魂の理解者である Philip の元へ行くことは、兄の Tom との訣別を意味し、そうすることは Maggie にはどうしてもできない。それでは過去に囚われて、義務に従って生きようと決意しても、自分で食だけは得てゆきたいと Dr. Kenn のところで働くことも、世の中傷に逃われて、St. Ogg's には留れなくなる。

Philip からの手紙、Lucy の訪問、そして Stephen からの手紙とたて続けにあって、Stephen の切々と訴える誘惑の手紙にも動じることなく、Maggie の心ははっきり決ってゆく。

But soon other words rose that could find no utterance but in a sob: "Forgive me, Stephen! It will pass away. You will come back to her."

She took up the letter, held it to the candle, and let it burn slowly on the hearth. Tomorrow she would write to him the last word of parting.

"I will bear it, and bear it till death. . . . But how long it will be before death comes! I am so young, so healthy. How shall I have patience and strength? Am I to struggle and fall and repent again?—has life other trials as hard for me still?" (p.485)

Maggie がはっきりとした決意で、"With that cry of despair, Maggie fell on her knees against the table, and buried her sorrow-stricken face." (p.485) そして "Oh God, if my life is to be long, let me live to bless and comfort. . . ." (p.486) といった瞬間洪水が押し寄せてきて、Maggie を死なせてしまうということは、「彼らの世界に、マギーの住む場はなかったのである。」¹⁶ また「可酷な現実を死において逃避した受動的な女性」¹⁷ ならざるを得なかったのである。川本静子は Maggie は内なる「自己」をすてようとし、内なるものの外への隷属であり、「自」の自殺行為であるといい、そうした決定は道徳的決定で Maggie の精神発達であるという。この Maggie の倫理的存在としての自己確立の背景には「過去」から「現在」への発展的連続において人間の実体を捉えようとした19世紀の人間観があり、Maggie の自己の確立はまさしく時代の産物であると解釈している。¹⁸

しかし、Maggie の短い生涯は時代への屈服・敗北であって、「自己確立」というには余りにもすべての自我を棄ててしまって、存在がなくなっている。時代の流れに飲み込まれて、沈んでしまい、Maggie という女性の自我・個性は死んでしまったといたい。この時代にはとうてい存在し続けることができなかったといたいのである。

III

「みにくい家鴨の子」であれば、いつか成長して白鳥の仲間に入った時、美しく、誇り高くすいすいと泳ぎまわれるであろう。Maggie はいわゆる御転婆で時代が時代であれば何物かになれたであろう。頭がよく自我の強い女性として生れた Maggie は、いまだ女性の自我の確立・伝統のない時代にあっ

て、学ぶことも社会で活躍することも、能力を発揮するあらゆる道が閉ざされた中で生きなければならなかった。他によって、男性によって自分を映して生きてゆく道しかない。そこに、恋愛の過程にわずかに女性の個性を出せる道があったが、Maggie の場合は、それも破滅へと導くものであった。

Philip と Stephen の両者は、ある意味で Maggie の本性に各々に接近したのであった。この両者との関係では、ある面での Maggie の自然な様が見られる。そこには Maggie の抑え難い自我主張が現われている。Philip と Stephen が Maggie の中に見たものあるいは二人の男性の中に映し出された Maggie の姿は、肉体的（あるいは物質的）なものと精神的なものの二面性といえる。Philip は仇敵の息子であり、Stephen は従妹の恋人であるという因果関係もあるが、Maggie 自身の中では肉体と精神の分裂を起すことになり、どうにもならない破目に陥らざるを得ない。

肉体と精神の両面の存在である人間として、自分の存在を自分の中で創りあげてゆくだけの主体性はまだ確立していない時代であり、ヴィクトリア時代はより宗教的、道徳的価値観に重点があったから、Philip との関係では、“I would choose to marry him. I think it would be the best and highest love for me. . . ,” (p.413) “. . . to Philip—to her own better soul.” (p.416)であり、Stephenとでは、“temptation”, “I would rather die than fall into that temptation.” (p.422)となっている。そしてジョージ・エリオットは女性の生き方の限界を認識して、Maggie のような女性は消えざるを得ないことを早くから示唆している。

Then—the pity of it, that a mind like hers should be withering in its very youth like a young forest tree, for want of the light and space it was formed to flourish in!
(p.289-10)

また別に、Stephen との関係において、次のような Maggie の面を認めることができる。

. . . —to tell Stephen that her whole heart was Philip's. But her lips would not utter that and she was silent. (p.422)

And when something like that fulness of existence—love, wealth, ease, refinement, all that her nature craved—was brought within her reach, . . . (p.432)

Was that existence which tempted her the full existence she dreamed? (p.432)

このような要素は、時代の制約があるにもかかわらず、自我を主張して生きようとする女性の姿として、後のジョージ・エリオットの作品の中で繰り返し試みられている。例えば、*Middlemarch* の中の Dorothea にそして *Daniel Deronda* の中の Gwendren に、そうしたものを見てゆくことができる。

Notes

1. *The Writing of George Eliot* (New York: AMS Press), *Essay and Uncollected Papers*, XXII. p.325.
2. *Ibid.*, p.332-3.

3. George Eliot, *Romola*, in *The World's Classics* (London: Oxford Univ. Press, 1975), p.viii.
4. "Women had not found themselves." (Elizabeth S. Haldane, *George Eliot and Her Times: A Victorian Study*, p. 8)
5. 河村貞枝, 「ヴィクトリア時代の女性と職業」, 『英語青年——女性と英米文学』, 8月号, 1981, p.298.
6. F.R.Leavis, *The Great Tradition: George Eliot·Henry James·Joseph Conrad* (London: Chatto & Windus, 1979), p.30.
7. 川本静子, 「パメラの娘たち」, 『英語青年——女性と英米文学』, 8月号, 1981, p.286.
8. Erna Olafson Hellerstain, Leslie Parker Hume and Karen M. Offen, ed., *Victorian Women: A Documentary Accounts of Women's Lives in Nineteenth-Century Engnd, France and the United States* (California: Stanford University Press, 1981), p. 8.
9. *Ibid.*, p.129.
10. 藤田清治著, 『ジョージ・エリオットの小説——分析と再評価』 (北星堂, 1977), p.148.
11. 川本静子著, 『イギリス教養小説の系譜——「伸士」から「芸術家」へ』 (研究社, 1980), p.101.
12. *Ibid.*, p.105.
13. George Eliot, *The Mill on the Floss* (Everyman's Library, 1978), p. 9.
以後同書からの引用はページ数を本文に記す。
14. Elizabeth G. Gitter, "The Power of Women's Hair in the Victorian Imagination," *PMLA*, 99, No. 5 (1984), pp.936-954.
15. 川本静子著, 『イギリス教養小説の系譜』, p.105.
16. *Ibid.*, p.103.
17. 山脇百合子著, 『英国女流作家論』 (北星堂, 1982), p.228.
18. 川本静子, 『イギリス教養小説の系譜』, pp.107-11.